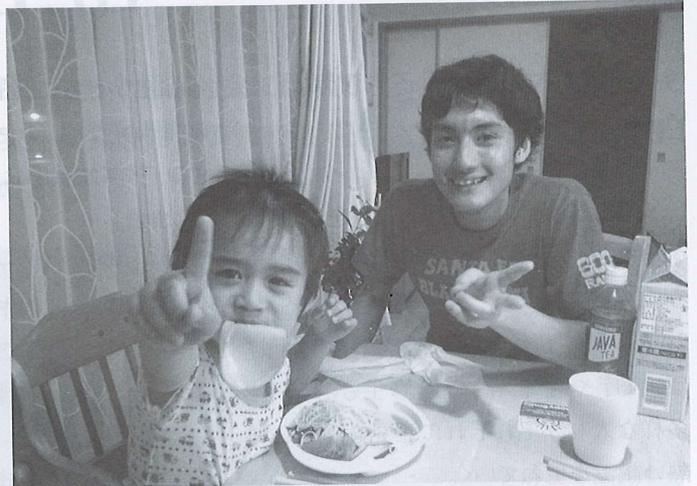


# 子育て体験インターンシップ。 ～みんなで育児をする“みん育”の時代へ～

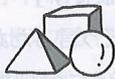
中央大学総合政策学部4年 高橋 康央さん

共働き家庭で子育てをするインターンシップ(就業体験)に子ども好きな中央大学男子学生が挑んだ。同時期に取り組んだ学生は16人、うち男子学生は1人だった。子育ては女性と思いがちだが、時代とともに考え方が変わっている。中大総合政策学部4年の高橋康央さんがその人で、「子育ては自分も成長できま



元気なY君、食事中でもハイポーズ

## 5歳男児といっしょ



子育てインターンシップとは、共働きの家庭に入って1日約3時間、学生2人1組で子どもを「お預かりする」。子どもを一人にさせないためだ。高橋さんらは5歳男児と対面した。親御さんが帰宅する夕方までの3時間。子どもは「お兄さんといっしょ」だ。

「夕飯を作って一緒に食べる。料理はしたことがなかったのですが、このインターンシップを通して少しできるようになりました。食事はご家庭が用意してくれます。“カレーを作ってありますから温めてください。きょうは時間がないから保育園の帰りにスーパーで買い物をして肉じゃがを作って”というように」

「作る時、味は子ども用に薄味にします。たくさん食べてほしいので、子どもの口に合わせてジャガイモやニンジン小さく切る。子どもが苦手な野菜でも“ほんの少しこれだけ食べてみようか”とアプローチする。食べて笑顔を見せてくれるとすごくうれしいですね」

子どもは嫌なものは嫌と、対人関係に容赦しない。大人が見せる気配りもしない。

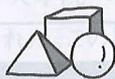
「自分がしてほしいようにします。嫌がることでも、どうすればしてもらえるか工夫します。これは自分自身を成長させます。きっと社会に出ても役に立つと信じています」

子どもと正面から向き合う。夕方には子ども向けのテレビ番組が毎日2時間ほどあるが、テレビに子育てはさせない。

「私たちがいるからこそできること、一緒に遊ぶ、このことを重視しています」

月に1度、インターンシップ仲間との情報共有会を開く。おもちゃでの遊び方から料理まで子どものための有意義な時間づくりがここからも生まれる。

## きっかけはいとこ



高橋さんは10歳のころから、いとこの3歳男児、1歳男児と遊んできた。その兄弟の兄が中学1年になった今でも良好な関係が続いている。

「祖母の家でいとこの2人と遊んだことがルーツですね」

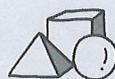
もともと子どもが好きだった。子育てインターンシップはツイッターで知った。「スリール」(本社・東京、堀江敦子社長)という会社を見つけ、1カ月間の研修を受けた。同社作成のテキストで座学。保育

士などの有資格者で現場実践を重ねた講師から具体的事例に基づいて教えられた。子育て体験研修は4回、訓練を受けた先輩学生に学んだ。

同社は「家庭と学生が力になりあうコミュニティ」を目指し、「子どもを見てほしい家庭」と「ワーク&ライフを考えたい学生」をつなげて、「お互いを笑顔にするコミュニティを形成する」としている。

学生は「働くこと」と「家庭を築くこと」を肌で学べる。子どもを見てほしい家庭は、学生に3時間任せることで仕事に専念できる。夫婦の時間をより円満にすることもあるという。親がリフレッシュすることで、また新たな気持ちで子どもに向き合える。笑顔に囲まれる子どもは幸せ。人見知りも減ったという。

## 学生は無給



学生は無給だ。交通費の支給だけで3カ月、子育て体験をする。

「アルバイトではありません。目的意識を持っている学生が集まってきます。仲間が増えました」と高橋さん。真剣な表情のまま、こう続けた。

「子どもが好きで一緒に遊ぶ機会がほしい程度で始めたことが、共働きをし